

# 「トイレできたよー 絵本ください！！」 ～放課後等児童デイサービスでのトイレ支援の取り組みについて～

こどもデイサービス たいよう 言語聴覚士 神 本 敦 史

## 1. はじめに

「基本的な生活習慣の自立とは、毎日の生活の中で習慣化された行為として、日常的に繰り返される生活の基本行動である」(玉井, 2018)。この基本的な生活習慣とは「食事」、「睡眠」、「排泄」、「着衣」、「清潔」の5項目が挙げられるが、これらは、身体的発達、情緒的発達、知的発達、社会性の発達など、様々な側面からの発達が相互に影響し合う中で少しずつ身に付いていくものである。しかし、発達に遅れのある児童はこれらの習得に時間を要したり不完全なままのケースが多い。特にトイレ習慣の獲得は、感覚の問題、拘りの存在、コミュニケーションの困難さ、生理現象が故の不安定さ…等、様々な要因で習得が思うように進まず悩んでいる療育者も多い。

当事業所においてもトイレ支援を必要としている児童が在籍するが、障害特性の問題、また、放課後の数時間の利用での支援ということもあり、習得・般化の難しさを日々感じている。

本研究では、トイレ習慣が未獲得の児童に対して、まずは一日全体のスケジュールを導入し、並行して「トイレ支援」も組み込み習慣の獲得を目指した。対象となる児童の特性を把握し支援に反映させるには試行錯誤を繰り返したが、一定の成果が得られたので、ここに報告する。

## 2. プロフィール

**氏名**: Mさん

**性別**: 女性

**年齢**: 7歳 (支援学校、小学部2年生)

**障害名**: 自閉症スペクトラム、知的障害

**療育手帳**: A

**理解面**: 日常生活レベルの言葉かけ・写真 (もしくは絵) の理解可能

文字・数字の理解不可

色・絵・写真・形の弁別、マッチングは可能

**表出面**: 有意味語はほぼ無し。発声はあるがコミュニケーション機能を持たない

簡単な日常生活レベルのジェスチャーは可能

(ちょうだい、いただきます、さようなら等)

何かを要求する時は相手の手を引っ張りその場所へ連れていく

**好きな物**: 絵本、ブランコ、高い所、菓子 (限定的)

**食事面**: 側で見守ることで自力摂取可能

偏食傾向あり

**排泄**: 常時おむつ着用

尿意の訴えはほぼ無し

**行動面**: 衝動性・多動性あり

思い通りにいかない時は泣いたり、自傷行為あり

**利用時の様子**：積極的に他者と関わることは少なく一人で過ごすことが多い。本コーナーで好きな本を並べて、指でタッピングしながら音や感覚刺激を楽しんでいる。活動等は参加できる時もあるが、気持ちの切り換えに時間を要しスムーズに参加出来ないことが多い。好きなことをしている時は集中できるが、それ以外は集中が途切れやすい。急に痙攣を起こすことがあるが原因が分からないことも多い。

**利用状況**：3回／週、放課後に当事業所を利用。その他の曜日は他事業所を利用。

### 3. 支援開始前の様子

学校ではほぼオムツを着用しオムツ内で排尿しているとのこと。一時期、保護者の意向で普通の下着に変更するも定着には至らず。当事業所でも、オムツ内に排尿した後の脱衣行為や、床に排尿する行為が頻繁に見られる。尿意の訴えが無いため、時間を決めてトイレに誘導するも、強い拒否がありスムーズに個室に移動できない。どうにか個室に移動しても、便器に登って排尿する気配がないので部屋に戻るも、すぐにおむつ内に排尿をしたりと、誘導とMさんの尿意のタイミングが噛み合わない。トイレ誘導に「おやつ」や「DVD」を強化子として設定するも行動に大きな変化は見られず(口頭で強化子の存在を言うのみ)。極稀に誘導にてトイレで排尿できることもあるが偶発的で習慣化は困難な状況。

支援の問題点として、Mさんの障害特性を正しく把握出来ておらず、トイレ場面に限らず、様々な場面で必要以上の声かけを行い不適切な関わりとなっている。その為、しばしば痙攣を起こしたり、脱衣行為、破壊行為が見られている。

### 4. 課題点

- (1) Mさんの障害特性、発達段階が把握できていない。
- (2) 一日のスケジュールを提示していないため、受け身の場面が多く自発性に乏しい。
- (3) 尿意の訴えがなく、自発的にトイレに行く習慣が未獲得。
- (4) 職員の支援方法や関わり方が統一できていない。

### 5. 支援計画

#### (1) 「自閉症支援のための現場評価キット」の実施

障害特性の中で理解レベルの側面を中心に検査する。結果を後の支援に反映させる。

#### (2) トラジションエリアを設置し、一日のスケジュールを写真カードにて提示

**ファイルを出す**→**熱を測る**→**おやつ**→**活動**→**帰る** を基本の流れとして、必要に応じてカードを追加していく。

#### (3) トイレのスケジュールを3枚の写真で提示し誘導する

**便器**→**手洗い**→**強化子** を固定して提示する。支援開始時の強化子は「菓子」を設定する。

#### (4) 職員の関わり方の統一を図る

声かけは最小限に抑え、提示しているスケジュールに沿ってMさんが自発的に行動出来るように促す。

## 6. 支援の経過とMさんの様子

### (1) 「自閉症支援のための現場評価キット」の実施

支援を計画・開始する前に上記の検査を実施した。38項目の検査の中から「プットイン課題」、「実物・色・形の分類」、「絵カードのマッチング」、「ボトルの組み立て」、「レゴブロックの組み立て」を実施する。個室で職員と1対1で課題に取り組むことには慣れているようで、落ち着いて受けることができる。色・形・絵・実物の弁別は可能で、マッチング課題でも正答が得られた。レゴブロックの課題では、4ピース程度であれば見本を見ながら完成させることが可能。手指の巧緻性まずまず。検討事項として、手元に物品が多いと注意が逸れて遊びになりやすい為、提供する際は量の調整が必要である。また、言語的な指示よりも視覚的な情報に理解が得られやすい為、絵や写真を活用した情報提供が望ましいと考える。

### (2) 一日のスケジュールカードの提示

上記の検査結果に基づいて、カードのタイプは主にイラストカードを採用し、行動時の注意を持続させるために移動式で行うこととした。開始時はスケジュールの提示量を1枚から始め、カードと行動をマッチングさせることを目標とした。

#### <支援開始から1ヶ月目>

まずは「キューカードを持ってトラジションエリアに移動する」ことを目標として、段階的に「キューカードを貼る」→「スケジュールカードを取る」→「移動する」→「移動先の袋に入れる」→「(活動等)行う」が行えるように支援を行う。Mさんにとっては初めての取り組みのため、キューカードを渡してもすぐに手放したり、トラジションエリアに誘導してもスケジュールカードに注意が向かなかったりと、全ての行動においてプロンプト(主に指差し、クレーン)を要している。

#### <2ヶ月目>

自発的にトラジションエリアに移動することは困難だが、回数を重ねるごとに移動に対する抵抗は少なくなりつつある。プロンプトを必要とする場面は依然として多いが、「キューカードを貼る」→「カードを取る」ことも出来つつある。また、カードの表示内容と事象が一致し始めているようで、活動等も理解して参加できることが増えてきている。

#### <3ヶ月目>

以前よりもトラジションエリアへの移動がスムーズになってきており、スケジュールに沿って行動できる場面が増えてきている。そこで、カードの提示量を3枚程度に増やす。しばらくは、上から順にカードが取れず、好むカードを抜き取ることが多いが、状況に応じてプロンプトを出し続けることで、少しずつシステムに理解を示すようになる。また、3枚のカードを提示する際、3枚目はMさんが好きな活動(ブランコ)を設定することで、見通しを持って、意欲的に取り組めるように配慮した。

#### <4ヶ月目>

お迎えの時間までの全てのスケジュールカード[写真1]を提示する。スケジュール通りに行動できない日もあるが、来所するとすぐにスケジュールをじっと見て確認するようになった。好きな活動がある時は、自らトラジションエリアに行き、その活動のカードを取り自ら移動するなど自発的に行動できることも見られ始めた。しかし、本来の予定を飛ばして好きなカードを取ることもあるため、継続的に状況に応じたプロンプトは必要である。



[写真1]

#### (3) トイレのスケジュールを3枚の写真カードで提示

開始時は写真カードにて便器→手洗い→強化子(菓子) [写真2]を提示し誘導を行う。提示後はMさんが自発的に行動できるまで待つ。  
※強化子の「菓子」は、後に見直しにて「絵本」に変更する。

#### <支援開始から1ヶ月目>

まずは“トイレに慣れる”ことを目標とし、個室に入れたら強化子を渡すように支援を行う。開始時、トイレのスケジュールを提示しながら誘導する。トイレの理解はしているようだが発動性が乏しく、移動できない場面が多い。また、排尿の間隔時間は約1時間30分～2時間と判明する。(水分摂取量によって多少の誤差あり) これを目安として、トイレの誘導時間を設定する。



[写真2：菓子]

#### <2ヶ月目>

依然として、誘導してもスムーズにトイレに行くことは困難。どうか移動できたとしても、強化子の菓子を食べたり食べなかったりと、菓子によってトイレに行く行動が強化されない。トイレでの排尿はほぼ無し。

#### <3ヶ月目>

支援に大きな進展が見られないことから、「菓子」はおやつの中でも提供しているので違う強化子がいいのではという意見が上がり、強化子の見直しを実施する。そこで、Mさんが余暇時間によく見ている「絵本」を強化子として再設定する。排尿の失敗が余暇時間に多いことから、時間的にも誘導しやすいと考えた。トイレ用のスケジュール[写真3]も一部変更し、条件も“排尿出来たら絵本がもらえる”に変更する。その後、「絵本」を強化子にしたことで、誘導時に提示するカードへ注意が向くようになってきた。それに伴い、時間はかかるがトイレに移動できる回数が多くなった。



[写真3：絵本]

#### <4ヶ月目>

トイレに行く機会が増えたことで、偶然だがトイレで排尿できた場面があった。この時、スケジュールをしっかりと確認させながら、流れに沿って強化子の「絵本」を渡すことができた。最初は十分に理解できていない様子だったが、回数を重ねるごとにトイレで排尿できる場面が増えてきた。最初は「絵本」カードの受け渡しも半信半疑であったが、今では嬉しそうにカードを職員に渡して絵本を受け取ることができるようになった。

絵本ください



[写真：カードを職員に渡す時]

やった——！



[写真：職員から絵本を受け取る時]

#### (4) 職員の関わり方の統一を図る

支援開始前に、事前の検査結果を基に対象児の特性を説明し、以下のことを統一するように伝える。

- ①言語指示は最小限にし、曖昧な表現は避ける。
- ②プロンプトの出し方を全職員が統一する。
- ③職員がスケジュールカード以上の存在にならない。
- ④誘導時は焦らせず、自発的に行動できるまで待つ。
- ⑤遊ぶ時はしっかり遊んであげる。

## 7. 結果

一日のスケジュールカードの提示により、全てにおいて自発的に行動できるようには至っていないが、キューカードを見せて、気持ちが切り替わるまで少し待つことで、拒否なく移動できる場面が多くなった。スケジュールカードの提示量は、最初は1枚から始めたことで、行うべきカードにしっかりと注目できるようになり、段階的に増やしていったことで大きな混乱なく一日の流れを理解できるようになってきた。スケジュールの最後に組み込んだ「外遊び」も楽しみにしているようで、個別課題を終えてそのカードを取る時は非常に嬉しそうな表情を見せる。

トイレ支援においては、最初に設定した強化子では自発的な行動には至らなかったが、その後の見直しにて「菓子」を「絵本」に変更したことでトイレのスケジュールに注意が向くようになって

た。回数を重ねるごとにトイレでの排尿と「絵本」が結びつくようになり、徐々にトイレで排尿できる場面が増えた。誘導後のスムーズな移動や排尿の訴えまでは習得出来ていないが、最近では絵本が欲しい時には自発的にトイレに行く場面も見られている。また、「絵本」の受け渡し時は、一方的ではなく相手を意識しながら行えるようになった。

職員の関わり方においては、事前に統一事項・注意点を伝えるも、Mさんの行動に反応して“つい”必要以上に言葉かけや介助をしてしまう状況が見られた。良かれと思つてのことではあるが、その都度、職員同士でその状況に適している関わり方の確認作業を行った。徐々にではあるが、関わり方が統一できるようになったことで、どの職員が関わってもMさんの行動に大きな違いは見られなくなった。

## 8. 考察

今回のトイレ支援を開始するにあたり、包括的な取り組みが必要と考え、「トイレ支援」と合わせて「スケジュールの提示」、「職員の関わり方の統一」も計画の中に組み込んだ。その結果、開始前と比べ明らかにトイレで排尿できる回数が増加した。その要因として、「スケジュールの理解」と「適切な強化子」が挙げられる。

スケジュールに関しては、提示された情報を理解して一日を過ごせるようになったことが、トイレ場面での行動の理解にも良い影響を与えたと考える。また、一日のスケジュール、トイレ場面の双方において、流れの最後に「楽しみ」を視覚的に提示したことも「理解→行動」の定着に繋がったのではないだろうか。職員の関わり方も、カードが示す情報以上のプロンプトは控えるようにしたことで、誰が関わっても安定した指示が出せたのも一つの要因と考える。

しかし、トイレ場面において、流れが理解できたからといってすぐに行動が伴わなかったのは、行動に対する意欲の乏しさがあつたのではないだろうか。実際に、強化子を“お気に入り”の「絵本」に変更した後からは、明らかに行動の変化がみられた。結果的にトイレで排尿できるようになったことから、意欲につながる適切な強化子を選択・提供することが重要だと感じた。

また、発語の無いMさんが何かを訴えることは容易ではないが、「絵本カード」を表出ツールとして使用できるようになったことは想定外の成果であつた。職員に対し「カードを渡す（絵本をください）」→「絵本が出てくる」→「絵本がもらえる」→「嬉しい」というやり取りは、成功体験となると同時に、他者とのコミュニケーション能力の向上に繋がり、今後、違う場面でも生かされると考える。

## 9. 終わりに

今回のトイレ支援では一定の成果が得られたが、これをゴールとするのではなく、Mさん自身が尿意を感じて、自ら判断し行動できるようになることが最終目標である。生理現象が故の難しさもあるが、日常の中の習慣として定着していくように今後も支援を継続していきたい。

また、効果があつたアプローチ方法や着眼点は違う場面でも生かされると考える。支援者の一人として、Mさんの人生が少しでも穏やかで充実したものとなるように見守っていきたいと考える。

## 10. 謝辞

本研究集録を作成するにあたり、御協力頂きましたMさんに深く感謝申し上げます。

<参考文献>

玉井美和子（2008）『育ち合い－基本的生活習慣の自立をめざして－』．日本教材文化研究財団